

チートTS転生したら、
碁の神様と出会った俺
の人生

クロス・クロス・クロス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

チート能力を持って、ヒカルの碁の主人公、進藤ヒカル（性別は♀）になった主人公。だが、原作知識はなく。チート能力を持っている転生TS進藤ヒカルは、割りと自由に囲碁を打ちながら、第二の人生を歩む。

ヒカルは碁以外にも色々やります。

※ヒカルの碁だけではなく、他の作品のキャラもごちゃ混ぜな作品です。

※現在の参加作品 ヒカルの碁・りゅうおうのおしごと

目次

大会に向けて

始まり	1
出会った二人	8
チート能力	13
お勉強とアキラと	22
彼女は未来の……、そしてヒカルが後年	
頭を抱える出会い	30
知らずに好感度が上がる。	35
燃え尽きたぜ	49
年末	58
アキラパパ	67
帰宅後	77
中学入学	80

始まり

チート転生して、現代の地球。それも日本人になったのは嬉しい。
でもね。

——出来るなら、2000年代に生まれたかった!!

スマホが無いのは、地味に痛いです。後娯楽、ゲームね。

携帯（カメラ無し）はあるから、俺が成人した辺りには、スマホが出るかもしれないが。

それと、不満はまだある。

「ヒカル、学校に行こう！」

「うん、あかり」

赤いランドセルを背負って、幼馴染みのあかりと共に手を繋いで学校へ向かう俺。

そう、転生した俺の性別は男ではなく、女だったのだ。

「あー、今日も平和だな」

「え、うん、そうだね」

この世界は平和な世界だ。

まだ、世界の隅々まで調べてないが、異能力者やそれに類似するオカルト系は確認出来なかった。

テンプレの鑑定スキルで、人物を調べられるので、国の要人を遠くから鑑定しても、漫画やラノベ的な役職に就いている人物は居なかった。

ああ、本当に平和だな。

日本には存在しないなら、海外かと思いき、ドラゴンボールの瞬間移動を使い、海外も探してみたが、何もなかった。

まあ、宇宙から何か来る可能性があるのですが、身体はしつかりと、隠れて鍛えてはいるが。

「何か、起こらないかな」

「何かって?」

「うーん、幽霊とかオカルト的な」

「何それ」

クスクスと可笑しそうに笑うあたり。

「可愛いなあ」

「えー、ヒカルの方が可愛いよ」

「そんなことない！」

俺は同性ということを利用して、この可愛い幼馴染みに抱きついた。

ああ、刺激がほしいけど。これはこれで有りかもしれないな。

俺が小遣い稼ぎに、爺ちゃんの蔵の碁石盤に宿っていた幽霊、いや。碁の神様と出会う三日前だった。

★

——ヒカル 小学六年生 自室

前世では持っていなかった一人だけの空間。

前世の俺の家は貧乏で、アパート暮らし。自分だけの部屋とか、一軒家とか憧れだった。

結局、前世ではオッサンになるまで、フリーターのままで、暴走した車に撥ね飛ばされて、俺は死んだ。

二度目の人生は将来の為にお小遣いなどは基本的に貯金している。それ故に自室は今の性別、女の子の部屋としてはかなり質素だ。

そんな部屋に俺と幽霊が今、存在している。

「なるほど、それで碁盤に憑依していたわけか」

藤原佐為と名乗る幽霊は、平安時代に囲碁で対決をして相手のイカサマで動揺して敗北。

その後は入水。佐偽は成仏できずにこの世界に留まっていると言う。

碁をもっと打ちたい。そう言う幽霊に、俺はドキドキワクワクしていた。

チートスキルはあるけれど、この世界には異能力者などは居なかった。

いや、佐為と出会うまで居なかった。

だから、俺は佐為の願いを叶えるつもりだ。と言うのも、俺はこの世界では異物のように感じている。

チートの能力はおいそれと人に見せたりはしないが、転生したことで、雰囲気や生活の態度で、同世代の子供たちとの溝がどうしても出来てしまう。子供は大人が思ってい

る以上に鋭い。あかり以外は本能的に俺を避けられている。

そんな中で、友達と呼べるのは、幼馴染のあかりという女の子だけだ。

あかりはとても可愛く、妹の様にも思っている。男だったら速攻でアプローチをしているところだ！

で、この世には存在しないオカルト的な者が現れたら？

正直嬉しいのだ。ジャンルは違うが似た様なこの世界に本来存在しない者同士。

ま、俺が勝手に親近感を持っているだけだが。

「しかし、囲碁か」

『ヒカルは囲碁をしたことないのですか？』

「ああ、今の時代。囲碁以外にも娯楽が多いから。それに囲碁は年寄りがやるイメージがあるからね」

ちなみに言葉使いはお婆ちゃんに「女の子が男言葉使うなんて！」と怒られているが、なかなか直らない。やはり男だという。

『そうなのですか？　ならば、私が教えましょう！　囲碁は楽しいですよ!!』

本当に囲碁が好きなんだな。よし、やってみよう。

「とは言え、碁盤なんて無いし。買うとなるとちゃんとしたやつは高いから……。あ、お爺ちゃんが確か囲碁をやっていたな」

『ヒカルのお祖父様ですか?』

「そ、お爺ちゃん」

昔の碁の達人なので、現代の碁を打つ爺ちゃんとも戦えると思ったが、囲碁初心者の俺は、佐為の指示。小目とかコスミとか分からず、もたもたしている間に、爺ちゃんは小さくため息をついて、出直せと言われてしまった。

やはり、いきなり対戦しようと思ったのが間違이었다。

と言う訳で、素直に近くに囲碁教室が無いか調べて、そこで囲碁を学ぶことにしたのだが。

まあ、カツラの被ったマナーの悪いオッサンに「大の大人がネチネチ、男らしくない」とかつらを引っぱがして、意地悪な指導碁を注意したら、泣いて逃げてしまい。囲碁教室の先生に滅茶苦茶怒られた。

翌日、俺は阿古多さんに頭を下げて、許してもらったのだが、その日は気まずいので帰ることにした。佐為がわー、わー、していてちよつと気分が悪くなったところで、駅前に囲碁サロンを偶然発見。

佐為の機嫌取りに、せつかくだからと見に行くことにした。

憑依されている影響が地味に辛いなあ、と苦笑いをしながら、囲碁サロンに入る。

そこで、俺は塔矢アキラという少年と出会った。

出会った二人

「あら、いらつしやい」

「こんにちは、こう言うところ初めてなんですけれど」

「あら、そうなの？ でも、女の子も歓迎よ」

受付のお姉さんに、このサロンの説明を聞いていると、視界に俺と同世代の男の子が居るのを発見した。珍しいな。誰かの付き添いかな？

「棋力はどれくらい？」

「棋力？ 計った無いので分かりません。ところで、彼は？」

「え、ああ、アキラくんは」

「彼と組めませんか？ 同世代は彼だけみたいだし」

俺がそう言うのと受付のお姉さんは、少し困った様な表情をしていたのだが。

「対局相手を探しているの？ いいよ、ボクが打つよ」

「ありがとう、俺の名前は進藤ヒカル」

「俺？ えっと、僕は塔矢アキラだ」

「よろしく」

「こちらこそ、よろしく。じゃあ、はじめようか。(佐為、指示をくれ)」
『ええ、いきますよ、ヒカル』

アキラと碁を打ってしまったのだ。佐為と言うチートの言う通りに。

「あら、もう終わったの？」

「ええ、終わりました。けど、思ったよりも碁の対局って疲れますね。打つのにもの凄く時間が掛かりますし、へとへとです」

「あらあら、なら慣れる為にこういうのはどう？ 来週行われるのだけど」

受付のお姉さんに差し出されたチラシは、こども囲碁大会と書かれていた。

「これは？」

「全国から強い子供達が沢山来るの」

「へー、面白そうですね。ありがとうございます。行ってみますね」

こうして、俺は家に帰った。この後、囲碁サロンで起こった騒ぎなど知らずに。

囲碁サロンの帰り道のことだ。

「あ、そうだ」

『どうしたのですか？ ヒカル』

「そう言えば、折りたたみの安いのなら、買えるかなって」

『ええっ!? 本当ですか!? ヒカル!!』

「貯金でも買えるはずだ。確か」

『買いましょう！ ヒカル!!』

「はいはい」

ああ、アマゾンがあれば……と思ってしまう今日この頃……。

あれ？ でもこの世界にアマゾンって産まれるのか？ けど、アマゾンではなくても、似た様な会社は出来るか……。

よくよく考えたら、こういう知識もチートかな？ この世界でも前世の地球と同じことが起きるか分からないけど、参考にはなるか。

「投資か……」

結果だけ、言えば。俺の考えは後に大当たりすることになる。

けれど、今すぐどうこうなる様なものではないので、割愛する。

ちなみに、リチウムイオン電池などの開発者達のドキュメンタリーを見ていたので、苦しいときに恩を売ることができた。

★

ヒカルが立ち去った後、アキラはじつと碁盤を見つめ続けながら、自分がヒカルに指導碁を打たれたことに気づいた。

碁石を打つ手つきも素人だったヒカル。

けれど、対局をしている途中でヒカルの実力に気づいた。

「か、彼は何者なんだ？」

いつの間にかアキラの周りに集まっていた常連達、受付嬢の市河が居たのだが。

「彼？ アキラくん。あの子は女の子よ」

「え?!」

「気がつかなかったの？」

「……………」

言葉遣いと外見が少年だったので、アキラは気づかなかったが、実はうつすら胸が膨らんでいるヒカル。

それと、全体的に骨格が丸みがあるので、同じ女性の市河は一目で気づけた。

「ほ、本当ですか？」

「ええ」

女の子に負けたと分かり、自分には差別意識は無いとアキラは思っていたが、やはり

アキラはちよつとショックを受けることになった。

チート能力

翌日、俺は佐為と共に、財布に金を入れて近くのデパートのおもちゃ売り場に来ていた。

佐為は色々と初めて見る物が多いので、きよろきよろしていた。

「へー、意外と種類あるんだな。大きさとか」

『そうですね。このまぐねつと？ というのはなんででしょうか？』

「磁石が碁石、プラスチックって言う軽い素材に入っていて、手がぶつかつた時とかに位置がずれたりしない碁石だよ」

『ほほお、そう言う物があるのですね。ですが、個人的には普通の碁石の方が良いです』
「そうだね。マグネットの碁はちよつと小さいから。もう少し大きめのを、ああ、これとかどう？ 四千円台で、大きさもちょうど良くて、全体が見やすそうだ」

『ええ、それが良いですね』

碁盤を購入した後は、本屋にも寄った。

まずは囲碁の入門書を購入して、佐為と共に今の碁と昔の碁、どれくらい違うのか確

認した。

アキラと対局をしたときに、握ると現代の囲碁ルールを色々教わったからだ。

佐為とデパートのフードコートで碁の本を読みながら、俺はメロンソーダを飲む。

「けれど、こうして読んでみると碁も楽しそうだな」

『おおつ、ヒカルも碁を本格的にやってみますか?』

「そうだな……」

この時、俺は佐為に自分の異常性を教えるか悩んでいた。

けれど、ちょうど良い機会なのかもしれないと思った。

「家に帰ったら、一局打とう。それと、その時に佐為に伝えたいことがあるんだ」

『伝えたいこと?』

「そ、俺の秘密」

★

——ヒカルの自室

家に戻り、さっそく自室で折りたたみの碁盤を取り出して、佐為に俺と向い合って座ってもらう。

「今から言うことは、佐為も信じられないかもしれない。けれど、まぎれもない事実で、その証拠も見せる」

『それは？』

「俺はこの日本とは違う平行世界の日本で死んで輪廻転生した人間なんだ」

俺の言葉に佐為はポカンとした。

『ひ、ヒカル？ 貴方は何を』

「その証拠として、俺は異能力が使える。まあ、物騒な力はここでは使えないから。スキルの方を見せよう」

『すぎる？』

「そう、スキル。佐為。俺は今日初めて碁で対局する。それだけは忘れないでくれ」

スツと俺が佐為を見据えると、俺が真剣なのが伝わったのだろう。佐為は真剣な表情で頷いてくれた。

『分かりました』

「じゃあ、始める前に。少し待ってくれ。少しスキルを操作をする」

俺はステータスと頭の中で念じ。半透明のゲームウインドウのような物を脳内に呼びだし、囲碁スキルにスキルポイントを再配分する。

すると、スーツと頭が急にクリアになり、まるで危ない薬をキメたかのように目の前が一瞬だけ真っ白になった。

「先手はどうする?」

『ヒカルに』

「分かった。それと」

『?』

「倒すつもりで行くから」

こうして、俺と佐為の初めての全力の戦いが始まった。佐為には俺の向かい側に座ってもらい、扇で碁石を置く場所を指示してもらう。

パチリ、パチリと言う音だけが部屋に響いた。

対局が始まり、どれだけの時間が過ぎただろう。数時間?　もしかしたら、まだ十分かもしれない。

けれど、碁盤は白と黒の碁石で美しい模様を描いていた。

『ひ、ヒカル!』

——ポタリ、ポタリと紅い雫が俺の両方の両目と鼻から流れ落ちている。視界も、やや紅い。口の中が鉄の味がする。軽い吐血もした。

「あ、……ありません」

その言葉を言い終えた後、俺は意識を失った。

『ひっ、ヒカル!!』

意識を失う直前、俺の耳に聞こえてきたのは悲痛な叫びを上げる佐為の声だった。

★

あの後、夕食だと呼んでも二階の自室から降りてこない俺を心配した母さんが、部屋に来て目と鼻から血を流して倒れている俺を発見。大騒ぎになった。

佐為に憑依された時にも倒れたので、両親は何か重い病を患っているのでは？ と不

安な表情をしていたが、大きな病院で検査入院しめ、検査の結果、命にも別状は無く。変な病気も無いので、両親と祖父母はホッと安堵していた。

病院の個室で、俺は安静することになった。

「まさか、ここまでわたしには、碁の才能が無いとは」

『どういうことですか、ヒカル?』

ベッドの上、パジャマ姿で窓の外を眺めながら、俺は佐為に告げる。

「俺の力は、才能。不得意な技能でも能力を上昇させて使用出来る。けれどその分不得意な才能を上げて使うと反動がくるんだ。俺は運動などは得意だから平気だけど、学者が行うような数学の問題を無理にやろうとすれば、前は鼻血だけだったんだけど」

俺の言葉に、佐為は

『なぜ、そんな危ないことを?』

「理由はいくつかあるけれど、一つは佐為と碁を対等に打ちたかった」

『……ヒカル』

俺は病室の窓の外を眺めながら、溜息をついた。

「もう一つは、俺の碁の才能を確認したかった。才能があるなら、時間はかかるけれど、対等に佐為と碁を打てたはず。けれど……」

倒れるほど、負担があるということは……。

俺の答えを察したのだろう。佐為はしばらく口をつぐんでいた。

『すぎる、というものはどうしてヒカルは持っているのですか』

「神様がくれたんだよ」

しばらくの沈黙の後。佐為は口を開いた。とても、真剣な表情で。

『ヒカル、貴方には才能があります』

「佐為？」

『対局した貴方は、逆鱗に触れた龍のように、私を攻めてきました。あのような苛烈な攻めは初めてです』

「そうなの？ スキルで大分碁のことを理解できたけれど、そこまでだった？ 佐為は軽やかにかわしていたように思えたけれど？」

『いえ、初めての対局でなかったなら、食い破られていた可能性があります。そして、あの対局の凄さをまだヒカルは理解できてません。ですから、ヒカル』

「ん？」

『もう、あの力は使わないでください。彼のように若くして死んでしまう』

彼とは前に憑依した人物だな。

「……………うん、余程のことが無い限りは使わない」

『絶対です！』

「嫌だ」

『ヒカル!!』

わーわー、騒ぐ佐為に俺は微笑みながら、スキルを使った時のことを思い出す。

念能力などの漫画やアニメの力を使った時とは違った、全能感と言えば良いのだろうか？

碁盤に碁石を置くのが楽しくてしようがなかった。

「佐為が生涯をかけて、打ち込んだ理由がちよつとだけ分かったよ」

『ちよつとだけですか？』

「当り前でしよう？　まだ、碁を始めて半月も経っていない」

けど、囲碁は面白いかもしれないな。チート能力を使えばオリンピックピックで金をとることも可能だ。戦闘面では、サイヤ人並みの力が手に入る。まあ、悟空みたいに強くなるわけではないが、それでも地球人類が全て敵になつても余裕で叩き潰せる。

借り物の力でも、勝てないモノ。二度目の人生、遊んで暮らすには過ぎた力を持ち、転生者ということもあり、周囲との疎外感を感じていた。

「だから、これから碁のことを色々教えてくれ」

『はい、勿論ですよ。ヒカル』

俺と佐為は笑い合い、これからのことを話し合った。

お勉強とアキラと

検査入院から退院した後、俺はあかりと遊びながら、佐為に碁を教わった。

それのお礼という、訳ではないが、俺は佐為と共に図書館へ行き、資料を探してみる。最新ではないが、現代のプロの対局が纏められた本がそれなりにあり。その本に佐為は興奮気味に喜んでいたので、俺は数日の間、図書館に入り浸った。

あかりも俺が碁を始めて興味を持ち、途中から俺と打ち始め、佐為には本を見せながら、ページを読んだら声をかけてもらい、あかりとマグネット碁を打った。

佐為が読む本はハイレベルなので、俺にはまだ理解出来ない。家に帰ってから、色々佐為に教えてもらおうことにしている。

あかりも碁が楽しいみたいで、はじめたばかりの者同士なかなか良い対局が出来た気がする。

『なるほど、素晴らしい対局ですね』

「(楽しめた?)」

『はい、こんなにも沢山の碁の書物があるとは、そろそろ試したくなってきました』

「(なら、そろそろ俺やあかり以外とも打とうか)」

『そうですね!』

「(なら、まずはアキラを探そうか、知っているなかで恐らく一番強いのはアキラだし)」
こうして、俺は久し振りに塔矢アキラと出会った囲碁サロンへ足を運んだ。

★

「こんにちはー」

「あ、君は」

「お久し振りです」

入り口で受付嬢のお姉さんに挨拶すると、囲碁サロンの店内がざわついた。店内にいた客からは「あの子」「アキラくんに勝った子だ」的な声が聞こえてくる。

「ヒカル!」

俺が店内を見回すとちやうど対局を終えたアキラが立ち上がり、俺の名前を呼んだ。

「やつほー、アキラ。久し振り、良かったら一局打たない?」

「え、あ、うん! もちろんだ!」

俺は受付嬢のお姉さんに料金を支払って、アキラの下へ。

「(佐為、勉強したから、この前よりも強くなった?)」

『ええ、ヒカルのお陰で、ふふふ』

「(なら、全力で……と言いたいけど、加減しなよ)」

『ええ、分かっていますよ、ヒカル』

この時、俺も佐為もアキラという少年の力を舐めていた。

「じゃあ、前回は俺が勝ったから、黒はアキラね」

「え？」

「ふふふ、全力でかかってくるが良い！ 挑戦者よ！」

冗談で魔王のようにやや明るく言ったのに、アキラ何故か勇気を振り絞るような感じで大きく頷き、

「う、うん。分かったよ！」

と、宣言するように、最初の一手を打ってきた。

こうして、俺と佐為は眠れる獅子を目覚めさせることになった。

★

さて、スキルを使っていない俺は、碁は素人だ。

なので、佐為の指示に従い碁石を置いていく。

碁石の置き方が素人なので、周りのギャラリーが最初はソレにざわつく。けど、俺の打った場所でざわつく。

でも、俺はそれを無視して、どんどん碁石を置いていくが、直ぐに佐為が戸惑い、いや驚愕したような雰囲気に変わり。

佐為の表情が一瞬苦悩するような表情を浮かべた後、刀のように鋭い雰囲気になったかと思うと、対局しているアキラの額に大粒の汗が浮かび上がった。

そして、四手目でアキラが微かに震え始めた。

「あ、ありません……」

「えっ？」

項垂れるアキラに、戸惑う俺に佐為が

『中押しです。アキラは負けを認めました』

俺は慌ててスキル【囲碁】スキルを五割ほど発動して、盤上を見てみると、

「(い、一刀両断?! さ、佐為! 小学生相手に何を!!)」

『すみません。ですが、そうでなければ……』

俺が佐為に更に言葉をかける前に、

「お、お嬢ちゃん、大丈夫か!？」

「え?」

周りで俺とアキラの対局を

と思つた時には遅かつた。

——ダラダラと鼻から血が出始めた。

「え、あつ! ちよつ、しまった!」

「え?」

アキラの声が聞こえたが、俺は慌てて両手で鼻を押さえて立ち上がり、

「お、お姉さんティツシユを下さい!」

叫んだ瞬間、

——グラリ、と激しい目眩に襲われた。

鼻血が出ているのに、慌てて立ち上がった為に俺はそのまま、

——バタンツ!! と激しく床に倒れ混むことになった。

★

「いやあ、(´▽`)迷惑をおかけしました」

「もう、びつくりしたわ。けど、大丈夫?」

「ええ、大分マシになりました」

囲碁サロンの端の方に椅子を並べて鼻にガーゼを入れた状態で休んでいる俺。

あの後、ちよつとした騒ぎになったが、内科医のお客さんがいて、軽く診察したあと問題ないと言ってもらえたので皆ホツとしていた。

俺も受付嬢のお姉さん。市河さんに、良くあることだと言って、納得してもらった。不用意にスキルを使うと大変なことになるね。

ちなみにアキラは心配そう近くの席に座り、俺を見詰めてくる。

「ヒカル」

「ん?」

「大丈夫?」

「大丈夫、大丈夫、それよりもアキラ」

「なに?」

「ごめんな」

「え、なにが?」

「俺、アキラの力を低く見ていた」

俺の言葉に、アキラが苦しそうな表情になった。

「だから、即座に一刀両断することにした。そうしないとこちらが負けた……」

「え……？」

呆けるアキラに俺は言った。

「また打とうアキラ」

俺がそう言うと、アキラの暗い表情だったが、直ぐに笑みを浮かべて、大きく頷いた。

「もちろんだ。ヒカル！」

こうして、俺達は連絡先を交換した。よし、これで佐為を退屈させない相手が一人出来た。俺では一局を全力で打つとそのまま入院するはめになるから助かるよ。

佐為はアキラが将来獅子になるか、龍になるか分からないと言った。

将来のことを考えて仲良くしておいた方が、佐為の為になる。それとアキラはプロを目指すか悩んでいたが目指すことにしたらしい。強い佐為と打てばアキラの修行にもなるので。お互いにWin-Winな関係だ。

あ、ちなみに俺が「アキラは俺と同じ龍にもなるのか」と呟くと、佐為は『ヒカルの場合、龍は龍でも、青龍などではなく、八岐大蛇ですね』とか言われた。

……解せぬ。

「ふう、そろそろ平気かな。アキラ。今日はこれで帰るよ」

「あ、うん」

「一人で大丈夫？」

「大丈夫ですよ。市河さん。じゃアキラ、市河さん。またね」

「うん、またね、ヒカル」

「またね、ヒカルちゃん」

この時、俺は疑問に思うべきだった。

アキラが大人が多いこの囲碁サロンの常連と仲が良いのか、囲碁の腕が年齢に似合わず凄まじいのかを。



「それ、本当ですか？ 市河さん」

「ええ、同じ年くらいの女の子でしたよ」

「面白い話ですね」

後日、ヒカルに眼鏡白スーツと心の中で呼ばれる緒方精次はニヤリと笑みを浮かべた。

彼女は未来の……、そしてヒカルが後年頭を抱える出会い

幽霊、佐為との生活は微妙に不便だ。

トイレとか風呂とか、後は着替え。

前世のことを話し、前世では成人した男性だと伝えているが、性別が女なので気を使わせてしまっている。

「悪いな着替えの度に部屋の外に出てもらって」

『いえ、構いません。それにヒカルは今は女の子ですから』

「うーん、未だに慣れないんだよな」

『そうなのですか？』

「うん、魂はやはり男みたいだ」

俺が笑うと佐為は苦笑いを浮かべる。

「さて、今日は学校は休みだし、どうしようか？」

『そうですね……』

今日はあかりもアキラも用事がある。先日葉瀬中学校文化祭で知り合った囲碁部の

筒井先輩も用事があると云っていた。

「ま、歩きながら、考えるか」

『はい』

★

駅前を本屋などを巡っていると佐為がふと思い付いたように聞いてきた。

『そう言えば、ヒカルはお小遣いをあまり貰っていないのにお金を持っていますね』

危うく動揺しそうになるが、俺は普段通りにこう返した。

「転生したときに、記憶だけではなく、貯金も持ってこれたんだよ」

『なるほど、ふりーたーと言っていましたね』

「ああ、割りと貯金していたんだ」

貯金していたのは事実だが、金はもち越せていない。なのに何で、金を持っているのか？

それは佐為と出会う前のこと、自分以外の異能力者を探しているついでに、チート能力を使ってヤバイ組織の麻薬の取引などを襲撃して稼いだのだ。

佐為がいるので、もう出来ないが、ゲスな奴等には容赦しなかつたので、かなりの額を持っている。ただ、未成年なので、出来るだけ使わないようにはしているが。

「しかし、最近はろくな出会いがないなあ」

『出かい?』

「ほら、タバコを碁盤に押し付けるやつとか、イカサマするやつとか」

『ああ、あの二人ですか』

葉瀬中の文化祭で囲碁の問題を出していたので、参加したのだが、途中邪魔した男がいた。その時、その男タバコを碁盤に押し付けたのだが。

『ヒカルはもう少し、手加減を覚えるべきですよ』

「まあ、やり過ぎたとは思うけどな」

将棋野郎は、手加減はしたが念を込めた一撃をボディに入れてノックアウト。その後、教師に引き渡した。

イカサマしていた同い年の男の子には、イカサマを確認して、横から人差し指を掴んで「イカサマが露見した以上、覚悟は出来てるな?」と、念を使って威圧したら思い切り泣かれた。その後、イカサマした少年には、対局者と店の亭主に謝らせて、「次は指を切り落とす」と釘を刺して帰った。

対局者と店の亭主がドン引きしていたのが分かったので、あの囲碁サロンには二度と行けない(涙)。

「やはり、念でなく、波紋にするべきだったか……」

『ヒカル、念も波紋の基礎修行の両方を見ますが、どちらも似たようなものですよ』

手加減しても、普通の人間相手に使わない方が良い力だけど、スキルで引き上げなくても、素で使えるようになってしまい、感情が高ぶると勝手に使ってしまうのが玉に瑕だ。波紋は問題ないと思うけど、身体が上がるので、殴ると危ないが。

少なくとも念と波紋の才能はあるみたいだ。まあ、原作の主人公達ほどではないけど。

「まあ、次は気をつける……ん？」

『どうしました？ ヒカル』

「いや、あの子」

『え』

「地図を見てキョロキョロしてる女の子」

『ああ、あの楚々とした美しい黒髪の和服の少女ですね？』

「うん、道に迷ってるみたいだな。ちよつと声かける」

『分かりました』

俺は地図を片手に泣きそうになりながら、途方にくれている女の子に声をかけた。

「なあ、君」

「え？」

振り返った少女を見て、俺は思わず見惚れた。

近くで見ると思った以上に可愛い！

「道に迷ってるの？ わかる場所なら案内するよ」

「え、あ、あの」

突然声を掛けられている戸惑う少女に俺は笑いかける。

「今、暇なんだ。交番の場所も分かるし、どうかな？」

「あ、はい、その実は……」

少女の目的の場所は、両親の知り合いの碁盤店だった。

知らずに好感度が上がる。

——囲碁盤店 前で

「ここで、あつてる?」

「うん、ありがとう。えっと……」

黒髪和服少女が口ごもったので、自己紹介をしていなかったことを思い出して、改めて自己紹介をする。

「進藤ヒカル、小学六年だ、よろしく」

「わ、私は天辻埋、小学五年生です」

一つ年下だったか。

……俺、今、自然に小学生六年生と自分で認識していたな。ちよつとショックだ。

前世と合わせてアラフォー! 前世と合わせてアラフォー! 前世と合わせてアラフォー!

よし、アイデンティティー確保。

やはり、今の性別が女で、小学生だというのはまだまだ、受け入れる辛いなあ。

「それじゃあ、入ろうか」

「え？」

「このお店に用事があるんだよね。最後まで付き合おう」

「は、はい、ありがとうございます。けどいいんですか？」

「お、わたしも囲碁してるから、ちよつと見たいんだ」

「囲碁、してるのですか？」

「うん、変かな？」

俺の言葉に、天辻さん首を横に降つた。彼女の表情にはちよつとの驚きと喜びを感じる。女の子で囲碁をしているのは珍しい。

「いいえ、私も囲碁を、しています」

「そうなの？ なら、時間があるなら、後で打とう」

「は、はい」

そして、俺達は囲碁盤店に入る。

店内はこじんまりとしてはいるが、高級店のような内装と雰囲気だった。

「いらつしやい」

店内に入ると、初老の男性がカウンターに立っていた。

「お、おじさま」

「おお、埋ちゃん。待っていたよ。おや、そちらは？」

「あ、わたしは天辻さんが、道に迷っていたので案内をしたんです」

「ほお、それはありがとう」

頭を下げる品の良い初老の男性に「いえ」と答える。そして、隣でかなりそわそわしている佐為の為に店内を見ても良いか訪ねる。

「あの見学しても良いですか？」

「かまわないよ。しかし、御嬢さんが見ても」

「いえ、碁をしていますので」

「ほお、それはそれは」

「あ、天辻さん、話を遮ってごめんね」

「う、ううん」

軽く天辻さんの背を押すと、天辻さんは初老の男性店員の下へ。

俺はそれからしばらく、店内を見て回る。

「どんな碁盤が良いの？」

『材質にも色々ありますが、一番良いのは榧で——』

「ふんふん」

それからしばらく、佐為の解説を危機ながら碁盤を見ていく。安いものなら、買って

も両親に怪しまれないかな？

「あ、これくらいなら、怪しまれずに買えそうだな」

「怪しまれずに？」

「うおっ」

後ろから声を掛けられて、変な声が出た。

振り返ると天辻さんが立っていた。

「何でもないよ。もう用事は良いの？」

「はい、終わりました」

「そうなら良いけど」

「はい、だから碁を打ちましょう」

「うん、いいよ。じゃあ、どこで打とうか」

俺がそう言うと、初老の男性店員が俺達に声をかけてきた。

「なら二階の応接間で打つかい？ 埋ちゃんを案内してくれたのだし、御茶くらいご馳

走しなればね」

「いいんですか？」

「ああ、勿論だよ。それに、熱心に碁盤を見てくれたからね」

「はい、見ている、面白かったですよ」

「最近は若いお客さんも減ったからね。熱心に見てもらえて嬉しいよ」
なるほど、熱心に見ていたから、店員に好印象を持たれたらしい。

「では、御言葉に甘えて」

「こつちだよ、二人とも」

★

二階の応接間は、恐らく上客用の空間なのだろう。

綺麗に掃除されていて、ソファやテーブルなどは高級感があった。

そして、出された御茶と御菓子も上品な和菓子だ。

「それじゃあ、終わったら声をかけてくれ」

「はい、おじさま」

「それと、ヒカルちゃんだったね」

「はい？」

「負けても気を落とさずにね」

え？ その言い方はもしかして、天辻さんはかなり強い？

「(アキラ並かな?)」

『分かりませんが、油断せずに行きましょう』

「おじさまー！」

「ああ、ごめんよ。ごゆっくり」

スツとドアが閉まると「おじさまったら」とちよつと拗ねた天辻さん。

「まあ、はじめようか」

「はい、それでは握りますね」

黒は天辻さんに決まり、俺と天辻さんは頭を下げ。

「よろしくお願いします」

互先での対局。俺はスキルを使わないように気をつける。

『いきますよ、ヒカル』

「(ああ)」

★

天辻埋は目の前にいる年上の少女を見ながら、少しだけ困っていた。

彼女は碁の才能に溢れ、将来はプロになり。タイトルを手に入れることを目標としていた。

関西では同世代ではほぼ敵なし。既にプロにもなれる技量があった。

折角知り合えた親切な、同じ碁が趣味な女の子。

心を折るようなことはしたくなかった。故に手加減をして勝つつもりだったのだが。
「(どうしよう、素人の手つき)」

碁の打ち方がどう見ても素人だった。

天辻は落胆した。だが、それも徐々に驚きが変わる。

「(え、ええ、そこは!?)」

「……強いね」

「え?」

「片鱗だけだけど、貴女は塔矢アキラ並かもしれない」

進藤ヒカルの言葉に、彼女は衝撃を受けた。

塔矢名人の息子の名前。強いと聞いたことがある。その彼を知っている?

困惑する天辻。ヒカルは碁盤から顔を上げて、天辻に問いかける。

「……どうする? 最初から打ち直す? 全力で戦うために」

進藤のその言葉に、碁盤上を確認して、天辻は暫し考え、深く呼吸する。

このままでは、負ける。仮にやり直して此方が勝つても、今まで対局した同世代の子達のように負けても彼女は騒がないだろう、と思った。

「最初からお願ひできませんか?」

「うん、今度は最初から全力で」

「はい、いきまます」

この日、彼女はもう一つの大きな壁と目標を見つけた。

★

「……ありません」

「ありがとうございます」

「……ありがとうございます」

俺は小さく息を吐き、佐為に視線を送る。

『アキラ並、いえ……アキラよりも強いかもしれません』

「(嘘、本当に?)」

『はい、将来が楽しみです』

俺はじつと碁盤を眺めている天辻さんを見る。

そうか、それは楽しみだ。

「あ、あの」

「何？」

遠慮がちに天辻さんは提案してきた。

「もう一局、いいですか？」

「もちろん」

俺は佐為を見ると、佐為も大きく頷いた。

あの後、二度と対局して、囲碁盤店を後にした。

おじさまと呼ばれていた初老の男性店員は、「埋ちゃんに勝った!？」と驚いていた。

そして、天辻さんとの三度目の対局を見て、更に驚いていた。

おじさまは、プロの対局も多数見ている方なので、俺の強さが分かったらしい。

そして、帰り道。

「じゃあ、明日の朝に奈良に帰るのか」

「うん」

天辻さんは本来は奈良に住んでいるらしく、今は両親の仕事でこちらに来ていたらしい。

「じゃあ、連絡先交換しない？ また、此方に来たときのために」

「いいのですか？」

「うん」

こうして、俺は天辻埋と出会った。

時間があれば、アキラやあかりにも紹介したかったが、今回は諦める。

「それでは、私はここで」

「ああ、またね。天辻さん」

「埋です」

「え？」

「呼び捨てで良いです」

天辻さん。いや、埋の言葉に頷き。

「ヒカルでいいよ」

「はい、ヒカルお姉様」

「ははは、年上だけど様って、柄ではないかな」

「では、お姉さん」

「うん、それで、……それじゃあ、またね」

「はい、また、会いましょう。ヒカルお姉さん」

正直なことを言うのと、付き合いがあっても、電話くらいだこの時は思っていた。

生涯に渡って、俺は彼女と付き合うとは、本当に思わなかったがな!!

★

凄いい人だった。碁の神様がいるなら、感謝を捧げたい。

「ああ、ヒカルお姉さん……、次は必ずや」

天辻は瞳をキラキラさせながらも、その奥には燃え盛る業火のような闘志を宿していた。

★

——○○年後 某ファーストフード店

「それで? 急に呼び出して、どうしたんだ、アキラ」

すつかり、プロの貫禄が出てきたスーツ姿のアキラ。だが珍しく、その表情は暗い。

「実は、日中の囲碁交流会で中国に行く、メンバー決まったんだ」

「へー、誰がいく……の?」

アキラの様子で、俺はもしかして、と思いアキラと目が合う。

「彼女が中国から指名された」

その言葉に俺は頭を抱える。

最近、囲碁に限らず、将棋やスポーツでもぶっ飛んだ人間が増えてきた。

彼女は普段からぶっ飛んでいるが、国内なので、問題はない。後始末は大変だけど。

だが、国外に出るとなると、色々と洒落にならない人物だ。

碁の強さで、彼女は世界でも上位に入る実力者。

容姿も美しく、礼儀作法もしっかりして、何処に出しても恥ずかしくない大和撫子だ。

——酒が入っていないければな!!

「あの娘以外にも居たでしょうに」

「最初は君を呼びたかったらしい」

「え?」

「中国は国を上げて、囲碁を盛り上げている。その中で世界的にも有名な女性の碁打ち
は、ヒカルか彼女だ」

「あー、まあ」

「でも、ヒカルはプロではない。だから、断念したんだ」

溜め息をつくヒカル。

「兎に角、あの娘に酒だけは飲ませないで」

「分かっている、けれど不安なんだ。だから一緒に」

「嫌だよ」

「何で!?!」

「今まで何回、あの娘を大人しくさせたと思うの?」

俺が微笑むとアキラは黙り混む。

飲まずな! と言ったのに酒を飲まれて、日本刀片手に大暴れ。一升瓶をらっぱ飲み

しながら、放送禁止ワード全開。

酒さえ飲まなければ問題ないのだが……。

「はあ、分かった。頑張るよ」

肩を落とすアキラ。

「うん、たまにはゆっくりさせて」

後日、俺はアキラと緒方さん。日本棋院のスタッフの涙目混じりのHELPに俺は結局中国へと向かうことになった。

緒方さんまで、涙混じりだったけど、あの子は何をしたんだ!?

燃え尽きたぜ

休日、学校が休みだ。

今日はアキラとヒカルは囲碁サロンで対局する約束をしていた。

連絡先を交換したあと、ヒカルとアキラは毎日ではないが、対局をしている。

だが、今日は少し用事があつて予定よりも遅れた上に人身事故で電車が動かず、かなり焦っていた。

——ヒカルは怒っていないだろうか？

アキラにとって、自分よりも実力のある同い年の少女との対局はアキラの実力を上昇させ、心にも男の子らしい変化を徐々にさせていた。約束に遅刻して嫌われたりしないだろうか、といった風に。

——早く打ちたい。ヒカルと。

ヒカルと対局で、向かい合い、ビリビリとした雰囲気での対局は、体力を消費するが、終わった後の充実感心地好い疲れだった。

——今日も楽しみだ。

ヒカルと碁を打つ時間は、アキラにとって大切な時間になっていた。

実は頭の片隅に、プロにならずにずっとヒカルとだけ碁を打っているのも悪くないかもしれない。と考えはじめていたりする。

「こんにちは、市河さん」

「あ、アキラくん」

囲碁サロンに入ると、困惑した表情の市河がいた。

「あれ、どうかしたんですか？」

「そ、それが……」

「？」

歯切れの悪い市河が、店内の人だからのできている一角があつたので、アキラは何となく人だかりが出来ている所へ近づくと常連達がアキラに気づき、道を開けた。

するとそこには、

「ヒカル、と……緒方さん!？」

「あ、アキラ。良かった! この状況、どうしたら良いかな?！」

アキラの見たもの。それは兄弟子である緒方精次が昔のボクサー漫画みたいに、真つ白に燃え尽きた姿だった。

「な、何故、緒方さんが……?！」

燃え尽きた状態に!? 困惑しているアキラにヒカルが説明し始める。

纏めると、緒方がアキラに勝ったヒカルに興味を持つ。

ここ最近、アキラがヒカルという少女と対局し始めて強くなった。

なので、ヒカルの実力を試しに、対局を試してみたのだが。

互先だったのだが、ヒカルに舐めてかかり、佐為にボコボコにされたのだった。しかもヒカルの提案で序盤は意味がないように思わせ、終盤で牙を剥いてくるような凶悪な罠を複数用意し、それがものの見事に嵌まった。

最初は期待外れ、中盤は思ったよりやるな。

終盤は、そんな馬鹿な!? とくるくる緒方の表情は変わった。

最初の対局が余程悔しかったのか、負けた直後に緒方は再戦を希望。

今度は真つ向からの切り合いのような対局だったが、佐為に切り伏せられた。

そして、三度目の対局で、やや緒方に押され気味になったが、佐為は日々成長する。そして、ヒカルは自身には才能がないと思っているが、二人がほぼ同時に新たな一手を見つけ出し、緒方は馬鹿な! と呻いて、投了した。

プロ棋士で九段、そんな自分がアマチュアのしかも小学生の女の子に三連敗。

あまりの衝撃に、緒方は真つ白になった。

「どうしよう、アキラ。さっきから声をかけているんだけど、反応が無い……」

「あー、うん……」

どうしよう、とアキラも困惑した直後。

「進藤！ もう一局だ！」

「うわっ！」

「あ、復活した」

突然ガバリ！と立ち上がると緒方は、ヒカルにもう一局と詰め寄るが、ヒカルは「あ、次はアキラと打つので」とアツサリ断る。

すると、グルンツ！ とホラー映画のように首を動かす緒方はアキラを見てこう言った。

「讓ってくれ」

「え？」

「順番、讓ってくれ！」

この後、大人気なく騒いだ緒方は、席を立ったヒカルに大人気ない！ と、ヒカルに割り和本気で脛を蹴られて、その痛みで彼はようやくやく冷静になった。

★

「藤原佐為……」

「聞いたことのない名前ですね」

「まあ、無名だと亡き師匠も言っていましたからね」

この日、俺は緒方さんと四回対局して、四勝。アキラとも一回対局して、一回勝った。

プロの緒方さんに勝ったことで、俺もとい佐為の実力に周りの常連はもちろん。緒方さんも驚き、どうやってここまで強くなったのかと問われた。

そこで前から佐為と考えていた、偽の設定を使った。

簡単に言えば、無名だけど古くから碁を研究している集団の一人だった師匠。藤原佐為という人物に教わった。と言うことにした。

更に本当かどうか分からないけど、藤原佐為という名前は偽名もとい、襲名みたいな感じで、受け継いでいる名前とも伝えた。

「けど、ヒカルを短期間でここまで強くするなんて、とんでもない方ですね」

「うん、タイトル持つてる人並みに強いと思うよ。結局一度も勝てなかったし」

君に無敗って……、とアキラが戦慄している。緒方さんも同じく驚くが、軽く咳払いをして、俺に質問をしてきた。

「しかし、何故君の師匠は表に出てこなかったんだ？」

「さあ？ その辺の事情は分かりません。知る前に亡くなりましたから」

「そうか……、ところで進藤はプロを目指すのか？」

「いいえ」

アキラには既に話していたので、アキラは驚かないが、少し残念そうだ。

緒方さんは驚いているが。

「何故だい？ 君ならプロとしてやっていけるだろ？」

俺はプロに誘われた時の回答は用意していた。

「俺は人の人生終わらせるようなことは、したくありません」

「人生を終わらせる……？」

アキラには既に理由も教えているので、なにも言わない。緒方さんは難しい表情をしている。

「プロの人は全てをかけて碁を打ちます。俺はそうじゃない。仮に全てを碁にかけている人と対局し、俺が勝った後、その人が自殺したら？ 将棋のプロでは自殺する人もいるようですよ」

最近は無いが、調べれば対局に負けて、思い詰めて自殺するプロは過去にはいた。

「何より、俺は碁を楽しむためにしています。勝ち負けではなく、もちろん、負けたら悔しいので全力で勝ちにいけますが」

「そうか……」

緒方さんはそう言うは何事か考え始めた。

「君はアマチュアで活動するのか？」

「はい、それにアマチュアに強い者がいると分かれば、暇な時にでも、プロの方から試しに対局を持ちかけてくるはずですよ」

現に緒方さんが釣れました。というと緒方さんは渋い顔になった。

「確かに君ほど強いなら対局をしたいと願うだろう」

「それで、今のところは満足なんですよ」

俺は佐為を見ると、緒方さんと良い碁を打って、満足そうな佐為が頷いていた。

それに、佐為とはプロを目指すかどうか話し合って、ならないことを決めた。

理由はいつか、佐為が成仏したあと。俺はスキルを使っても、佐為のように碁を打てない。

碁を打てないならば、引退するしかない。けれどそんな引退出来るだろうか？

イトルを手に入れていたりしたら、簡単には辞められないだろう。俺は佐為抜きで戦う羽目になる。

もちろん、その時にはある程度は実力をつけて、スキルの負荷や反動を押さえられるかもしれないが、辛い戦いになるのは想像できる。

仮に戦えたとしても、俺と佐為の戦い方が違いすぎる。

だから、アマチュアで活動するつもりだ。引退もしやすいし。

何より、生意気なアマチュアがいるらしい。で、寄ってきたプロ達を返り討ちにしやすいだろう。

まあ、気長にやるつもりだ。

「では、時間なので帰りますね」

「ああ、ではまた」

「はい、アキラも」

「うん、気を付けてね。ヒカル」

「分かっている、またね」

「さて、朝早くからいたお陰で、予想外に緒方プロと沢山碁を打てたけれど、作戦、上手くいくと良いな」

『はい、あの者と是非、対局を試してみたいと思います』

「うん、俺も見たい。佐為が塔矢名人と戦うところ。…九段を倒したんだ。興味を持つ

はず、その内に会えるかもしれないね。塔矢パパさんに」
『ええ、楽しみです』

ヒカルはニヤリと、佐為は扇で口元を隠しながら笑みを浮かべる。
非公式であろうと、小学生の女の子が緒方九段を倒した。

囲碁サロンの常連から話は漏れる筈だ。

そこに、塔矢をプロと俺もとい佐為が対局すれば？

「そう言えば、アマチュアの大会があったね、出る？」

『良いのですか？』

「うん、もちろん」

色々な人と打ちたいでしょう？

俺の言葉に佐為はウキウキしていた。

年末

緒方さんと対局してから、俺は中規模のアマチュアの囲碁大会に参加した。

意外と大人気ない眼鏡白スーツの緒方さんとアキラが大会に俺の応援をしに顔を出したお陰で、俺は注目され、気合いが入っていた佐為が対局は全て中押しして勝利。

前世ではただのオタクだったので、人に注目されるなんてなかったので、大分戸惑うことになった。

運営委員から、優勝コメントを求められたので、俺は無難に「勝って嬉しいですよ」と言っておいたが、何故か大会は盛り上がった。

小学生女子が大人を蹴散らして、優勝した事実は衝撃だったようだ。

緒方さんに「控え目なコメントだ」と言われたが、敵を作る必要はない。

女の子ということで、年配のお爺ちゃんお婆ちゃん達もかなり優しげに声援を送ってくれた。いやあ、照れるね。

こうして、俺と佐為のアマチュア棋士の活動が始まったのだが、俺がさらつとアマチュアの大会で優勝したことを両親に教えたら二人は良く分かっていたが、爺ちゃん達は凄く喜び、大会の棋譜を渡したら、穴があくほどじっと棋譜を見て、ヒカルは

天才だ！と叫んではしゃいでいた。

佐為のおかげで、ちよつと財布に余裕ができ、新しい碁盤を買おうかな。とカタログ見てたらいいちゃんを買ってくれたよ。

値段を知って両親が驚き、試しにカタログの一番高い値段の碁のページを見せたら二人は絶句していたが。

二人から見て、碁世界は摩訶不思議なモノらしい。

碁盤の慣らしで、あかりとお茶を飲みながら、まったり碁を打ち、新年のアマチュアの碁大会に参加しようと思っていたら、アキラから連絡がきた。

珍しいなあ、と思って電話に出ると、

「父さんがちよつと困っているというか、残念がつているんだ」

「残念？」

「ヒカルと対局出来なくて」

「なるほど」

緒方さんを倒した後、碁サロンに塔矢パパが来たらしい。

たが運の悪いことに、俺と塔矢パパとはすれ違っていた。

アキラは比較的時間があるが、緒方さんと特にアキラパパは忙しい。

アキラの話だと、アキラパパに佐為とアキラや緒方さんの対局の棋譜を見せたら、暫く何事か考えはじめて一言。「彼女と対局したい」と、呟いたようだ。

その後、しばらくは問題なかったが、あまりにもすれ違つうので、仕事を無理矢理休んで、俺と対局しようとしたが、流石に緒方さん達に止められた。

アキラに聞いた話しだが、十二月は特に忙しいみたいで、四冠を持っているのは大変だな。と思う。

佐為なら、タイトルを手に入れられるだろうけど。一つでも大変そうだ。

やはり、プロは目指さない方が良いかな。

「それでね、ヒカル」

「なに？ アキラ」

「来年、家に来ない？」

「え？」

アキラの話を纏めるところ言う話だ。

塔矢パパは新年から忙しい。棋院の打ち初め式は、今年は一月六日。

それと、一月の一日から三日は、挨拶周り。

けれど、それが終われば、どうにか時間が出来るらしい。

そこで、アキラパパは俺もとい佐為と対局をしたいらしい。

『あの者と……』

佐為が囁み締めるように、呟く。

古本屋で、塔矢パパの棋譜が載っている本を読んで、対局するのを夢見ていたからな。かなり嬉しそうだ。

「あ、確認だけど、それは本当に家に行っても良いの？ 正月の貴重な休み、家族で過ごす時間だと思っけど？」

「うん、大丈夫だよ」

「分かった、行くよ。楽しみにしてる」

「うん、分かった」

こうして、俺と佐為は来年、塔矢パパと対局することになった。

★

「やっぱり似合うね。あかり」

「えー、ヒカルの方が可愛いよ！」

十二月最後の日、午後。

俺とあかりは近所の神社でこども神楽に参加していた。

小学一年のときに、近所の神社で神楽を舞っている子供達を見て、彼女達の動きをスキルを使って真似したら、偶然神社の神主の奥さんに見られてしまい。熱烈にスカウトされた。

今では毎年午後に行われる、こども神楽舞のエースになってしまった。

ちなみに、囲碁と違って俺は踊りなどの才能があるみたいで鼻血などはスキルを使っても出ない。

それだけが救いだな。

「そう言えば、アキラくんは？」

「一応は声をかけただけど、どうだろうな」

あかりの問いにそう答える。

あかり以外に友達が居ないので、新しく囲碁友達になったアキラを神楽舞いを見に来ないか？ とさそつたのだが。

大晦日、恐らく家族か一門で忘年会参加している可能性が高い。

「ヒカル！ あかりさん！」

「あ、アキラくん」

「よっ、アキラ。それと緒方さんも」

「元氣そうだな。……へえ、似合っているな」

後ろから声をかけられて、振り返ると和服を着たアキラと緒方さんの二人が此方に歩いてきた。

「どうやら、緒方さんの車に乗せてきてもらったみたいだ。」

「ん、ありがとうございます」

「わたしも似合いますか？」

「ああ、似合っているぞ、なあ」

「う、うん、二人とも綺麗だよ」

緒方さんに話を振られて、少し慌てるアキラ。

俺の衣装は中央配置だから、他よりも綺羅びやかな衣装となっている。

「頑張つて、舞うから楽しみにしてろ、アキラ」

「う、うん、分かった」

「ヒカル、周りと合わせてね。まだ、入ったばかりの子もいるからね」

「大丈夫だ。考えて舞うから」

その後、今年のごども神楽舞は、好評で終えることが出来た。

ただ始まる前に、アキラと話をしていたところを、神楽舞のメンバーや神社のお手伝いさんに見られて、アキラが彼氏と間違われて大変だった。

アキラもお手伝いのお姉さん達に茶化されて、恥ずかしそうにしていた。

ドドメに神主の奥さんから「今年は神様ではなくて、一人に向けて舞ったでしょう？」とアキラを見ながら言われて、俺も動揺してしまったのだ。深い意味は無いが、わざわざ来てくれたアキラの為に舞ったのは事実だが。

それが更に誤解を生んだ。

ちなみに、俺とアキラが仲良くしていたので、あかりが拗ねてしまい、今夜は俺の家に泊まって子犬のように甘えていた。

うん、可愛いなあ。常に俺にくつついて、若干本当に百合っぽくなってきたなあかり。ちよつと将来が心配。

「もう時間か、残念だな」

「ご、ごめん」

「あー、気にするな。忙しいのは分かっているから、それじゃあ、良いお年を、それと塔矢パパに楽しみにしています。と伝言を頼む」

「分かった」

★

——緒方の車 車内

「碁だけではなく、舞まで見事だったな」

「はい、能などを見たことがあります。ヒカルの舞はプロのように上手でした」
そう言つて、ヒカルの舞を思い出し、頬を緩めるアキラ。

久し振りに顔を合わせたアキラが見たのは、ウィッグを付けてロングヘアに中央で踊る為に綺羅びやかな神楽舞の衣装を身に着けた、艶やかな美少女ヒカルだった。

薄つすらと紅などの化粧も施され、アキラはドギマギしてしまった。

「これは明子さんの勘が当たったな」

「え？」

「いや、何でもない」

緒方は父親だけではなく、母親にも目を付けられたヒカルに少しだけ同情した。

「ああ、それと後ろに置いてあるデジカメだが」

「え、はい。これですね」

「明子さんに渡してくれ」

「あ、見たことあると思つたら、これは母さんのだったのか」

「ああ、きつと驚くだろうな」

この後、家に戻りデジカメを母に渡したアキは、しばらくして、やや興奮気味の母に「頑張りなさい。応援してるからね」と、何故か応援され。普段以上にヒカルのことを根掘り葉掘り聞かれることになった。

アキラ。パパ

塔矢行洋。塔矢アキラのパパで、タイトルを四つ持っている人物。そんな人と対局することが決まっている。

正月の初日は穏やかだけれど、徐々に闘志を燃え上がらせている佐為につられるように、俺も日々の念などの鍛練に力が入る。

俺が考えて打つわけではない、だが、ヘラヘラして佐為の邪魔をしてはダメだ。

鍛練と平行して、精神鍛練を始める。これからもプロと対局することを考えて、本格的に瞑想を取り入れた。

俺は目を伏せて、口を閉じ、鼻でゆっくりと音を出さないように呼吸する。

前世のテレビ番組で、ヨガを教えているベテランのトレーナーは「瞑想する時は、自分が今息を吸っている。今は自分は息をはいている。と、意識しながら、徐々に無意識に持つていくと良い」と言っていた。

佐為も正座して、瞑想をしていた。あまり長い時間瞑想するのはまだ難しい。

それと、本番を想定して、塔矢名人の威圧に負けないように、佐為にお願いして、佐為と向かい合い。本気の佐為威圧を受けて耐える。この訓練のおかげで、対局時の佐為

が発する圧にスキルを使わずに、素の状態でもある程度平気になった。明鏡止水の心には遠いが、足は引つ張らないようにしなければ。

俺の様子がおかしいのに両親も気づいて、何かと声をかけてきた。少し、迷ったが、アマチュア囲碁大会が近いのと、凄く強い人と対局するだけでも教え
ておいた。

両親はなるほど、と納得し。アキラパパと対局する前日の夕飯がカツ丼だったのは、
思わず笑ってしまった。

「行こうか」

『ええ、ヒカル』

年末に新しく買ったラフな服を着て、俺はアキラの家に向かった。

★

「いらつしやい、ヒカル」

「久しぶり、アキラ」

出迎えてくれたアキラは、品の良いシャツとズボン姿。

良いところのお坊ちゃんだ。いや、女の子にも見えるな。三十年経っても、アキラパ

パミたいな渋い感じになる想像がつかない。会ったことないけれど、アキラはママさん似なのかな？

それと、アキラの家は想像していた武家屋敷！ みたいな大きさではないが、立派な品のある和風の家だった。

俺は持ってきた手土産の紙袋をアキラに渡し、アキラに家に入り、アキラの母。塔矢朋子さんと挨拶をする。

軽く話をしたのだが、何故か「髪は伸ばさないの？ 普段スカートは履かないの？」などのフアッションの話になり困惑した。

途中で、アキラが助け船をだしてくれて、アキラに手を引かれながら、アキラパパの元へ。

そんな俺達を見て、何故かアキラママが嬉しそうな表情をしていたのが気になったが、今はアキラパパに集中しよう。

案内されたのは、弟子の皆と研究会で対局する部屋だった。

「初めまして、私が塔矢行洋だ」

「進藤ヒカルです、初めまして」

お互いに自己紹介を行い、碁盤を挟んで座ると、アキラパパからいくつか質問された。俺の師匠は誰なのか、囲碁を初めてどれくらいなのかなどだ。

全てを答えた後、何事かを考えるアキラパパは、

「師匠と出会い、約三年でその棋力。信じがたいが……」

「打ってもらえれば証明できます」

「分かった」

俺が頷くと佐為が臨戦態勢に入った。

★

塔矢行洋は、目の前にいる息子と同年の少女が気迫に空気に思わず息を飲んだ。

本当に息子であるアキラと同年なのか？

息子から自分と対局しているようだ。弟子の緒方からは、タイトルホルダー以上の気迫を感じたと聞いていた。

普通に考えればあり得ない話だ。

小学生六年生、しかも女子がタイトルを持っていて棋士以上の棋力と気迫を放つなど。

だが、その少女は現実に目の前に存在する。

「名人が黒ですね」

「そのようだ。始めようか」

「はい、お願いします」

二人の対局が静かに始まった。

★

素人の手付きで碁石を置くとアキラパパは、少し驚いていた。

けど、対局が進めば気にする暇など無くなったようだ。

お互いにじつくりと碁を打つ。

プロの公式戦では時間制限があるが、今日はない。

対局が進めばアキラパパと佐為、二人の表情は徐々に険しくなっていく。

俺はスキルを使っていないので、対局がどうなっているか分からない、だが出来るだけ佐為の足を引っ張らないように落ち着いて碁石を碁盤に置いていく。

アキラパパからプレッシャーが凄い、だが負けない。

けど押し返す様なことはしない。受け流す。

白と黒が盤上を埋めていく。

アキラパパ、名人と佐為が作り出す世界。

それは、とても美しい世界が創られていく。

「素敵ですぬ」

俺は思わず、そう呟いていた。

★

「素敵ですぬ」

小学生なのに、無駄に息多めで呟くヒカル。

二人の対局の邪魔にならないよう、壁際で座っていたアキラはヒカルの表情を見て思わずドキツとした。

普段は男勝り、ボーイツシユな少女だが。良い対局になると、盤上を眺めながら額にうつつらと汗を滲ませ頬を紅く染め、うっとりとした表情になる。

自分ではヒカルを本気にさせられないことに悔しさと、本気でヒカルと対局出来る父親にアキラは嫉妬した。

自分がヒカルを対局中にあの表情したとは数えるほど。

「この時間がずっと続けば良いのに」

父、行洋を見据えながら、発したヒカルの言葉に、ギツと奥歯を噛ましめるアキラ。自分の実力は分かっている。自分の実力はまだまだ父よりも劣る存在だ。

もつと強くなりたい。アキラは心の奥に闘志を燃やした。

★

「ありません」

「あ、ありがとうございます」

名人の言葉を聞いて、俺は深い息を吐く。集中力が切れて心臓がバクバクいつてる。

対局が終わり、名人から対局中に受けていたプレッシャーが無くなったのもあり、俺は疲れが一気に体に来た。

佐為も疲労を隠せていない。だが、

『勝ちました』

絞り出すように言うので、恐らくギリギリの勝利だろう。

「ヒカル君と呼ばせもつても？」

「だ、大丈夫です」

「見事な一局だった」

「ありがとうございます」

俺が頭をさげ、顔を上げると真剣な表情の名人に俺が少し怯むと、

「君は何者だ？」

「え？」

「と、父さん？」

名人の言葉に、俺はやはり小学生の女の子が数年で名人に勝つことは、天才の一言で終わらせられる訳がないか。

だが、佐為のことを告げても頭のおかしい子供だと思われるか、馬鹿にしていると思われるだけだろう。

さて、どうするかな。と素早く考える。

「すうーっ、はあーっ」

俺は深く息を吸い、念を使って軽く圧を出す。

俺の纏う雰囲気が変わったことで、名人とアキラが、少し緊張した面持ちで、俺の言葉を待つ。

「改めて、自己紹介をさせていただきます。」

千年前、平安時代から神の一手を追い求める囲碁狂いの集団、藤原一門の最後の一人が私です。そして、亡き師である藤原佐為に、藤原一門の碁の全てを叩き込まれました。更に私はそこにいるアキラ君以上に碁の才能があった。それ故に名人とも互角に打つことが出来たのです」

「……………」

俺と名人は暫し見つめ合い、名人が目伏せて小さく息を吐くと、

「分かった。ヒカル君、また碁を打とう」

「はい、ありがとうございます」

俺はそれっぽいことを言って、誤魔化すことに成功した。

★

「恐ろしい才能を持つ少女だった」

その日の晩、塔矢行洋は自室の碁盤の前に座りながら、ヒカルとの対局を思い出す。

「表に出ずに一門だけで、神の一手を目指す。途方もないことだ」

話を聞いて、あり得ない。と行洋は思った。普通ならヒカルが嘘をついている。と考えただろう。

だがヒカルの打ち方は、歴史を感じる打ち方だった。それに、時折定石の型が古かった。それでもヒカルは強く、対局が進むにつれ、此方の一手を学び、どんどん成長していくのを感じた。

「プロを目指さないと行っていたが」

プロを目指さないのは、残念ではある。だが、そこまで残念ではない。何故ならば、次の対局が楽しみだ」

定期的に碁を打つ約束が出来たのは良かった。

予想外なこともあった。息子であるアキラに嫉妬されるとは思わなかったが。

「アキラにとって、良い刺激になれば良いのだがな」

息子のアキラのヒカルへの反応を思い出し、思わず微笑ましく感じる父、行洋だった。

帰宅後

囲碁の対局は時間が掛かる。

早く終わることもあるが、今日の相手はアキラのパパ、塔矢名人だったので、事前にアキラと話し合い比較的早くにアキラの家にお邪魔した。

名人との対局の後は、アキラも交えて検討を行う。

あーだ、こーだと佐為の言葉をそれっぽく告げると、名人はうむ。確かにつて感じでアキラはなるほど！ という感じで感心していた。

検討が終わり、じゃあ次はアキラと対局を、と思っていると明子さんが「お昼にしましょう」とやや怖い笑顔で、部屋に来了。

何時まで、碁をやってるの？ と言う副音声で聞こえた気がした。

俺とアキラは頷き、名人も黙って頷く。この時は奥さんに弱いパパとなっていた。

うん、碁を抜きになれば、明子さんが家のヒエラルキーが一番上なのだろう。

ちなみに、この後に軽い試練があった。

「出前を取りましょう。どれが良いかしら？」

明子さんが、ニコニコと俺に差し出してくるメニュー表。

……どう見ても高い店屋物の奴だ。

思わずアキラに助けを求めたが、アキラは馴れているのか、「どれでも良いよ」と言うし、アキラパパは「遠慮は必要ない」と何でも無いように言う。

オロオロしながらも、俺はイメージ的に寿司ⅡウナギⅢ天井だったので、天井を選んだが。

結局、全部対して値段が変わらないことが後に分かった。

いやあ、心臓に悪かったね！

ちなみに明子さんが、「遠慮しないでね」と、お高い上天井とか海老天井とか勧めてきたけど、「量が多いので」と言っただけにか、無難な値段の並み天井を頼めた。

いや、魂は男でもこの身体は女になったので、並み天井でも十分腹が脹れた。うん、やはり上天井とかはちよつと無理かな。

「ごちそうさまです」

「はい、お粗末様」

食後、明子さんが中心になって、色々と聞かれた。アキラと初めて会った時とか、最近のことを。

話終えると、明子さんに気に入られたような気がする。

食後の一服後、アキラと対局したのだけど、やたらと気合いが入っていた。

そして、俺が勝つと悔し涙を流し、俺は驚いた。

ここ最近、全力で対局をしてアキラは負けても悔しそうにしてはいたけれど、泣くようなことはなかった。

なぜ？ 思ったが、やはりアキラも男の子。

自分の勝てない相手と父が互角に戦うのを見て、男として悔しくなったようだ。

「僕は必ず、君と対等に戦えるようになるよ！ だから待っていてくれ！」

「あ、ああ、待ってる。アキラが強くなるのを」

佐為が打ってるので、罪悪感はあるが、俺がそう答えるとアキラは嬉しそうに笑った。

アキラパパは、そんな俺達を見て微笑み。

襖を開けて、お茶を持って入ってきた明子さんは、襖の向こう側で俺達の話聞いていたようで、部屋に入ってくると、ニコニコしていた。

何故かその時、ダンジョンRPGとかで、罨を踏んだ気分になったが、まあ、気にしないことにした。

中学入学

冬はあつという間に過ぎて、春。

俺とあかりは葉瀬中に入學した。

冬の間は、あかりに碁を教える感じで、俺も佐為に碁を教えてもらい。

時間が合えば、アキラや名人（アキラパパ）。緒方さんと碁を打っていた。

あ、爺ちゃんとも打った。佐為に打ってもらい、俺達が勝利、爺ちゃんは悔しそうだけれど、孫の才能を知って喜んでいた。

それと、コピーした名人との棋譜（許可は得てある）を上げたら更に喜んでいて、ちよつと引いた。

婆ちゃんに落ち着きなさい、と爺ちゃんは窘められていたが。

冬のアマチュア大会は佐為が再び蹂躪して、優勝。

応援に来ていた爺ちゃんが泣き、同じくコツソリ応援に来たアキラが偶然知り合った爺ちゃんの相手をしていて、申し訳ない気持ちになったよ。

大会後に名人の息子だと気付いて羞恥と恐れ多いと表情を赤くしたり青くしたりしていた。

「久し振りです、筒井先輩」

「お久し振りです」

「やあ、ヒカルくんにあかりちゃん」

入学して、俺とあかりは囲碁部へ。

去年は部員が筒井先輩一人で、全国大会に参加出来ず、今年も難しいと思っていたのだが。

「筒井さん、これお土産」

「え？」

「こ、こんちやっす」

俺は去年イカサマをしていた少年、三谷を偶然見つけた。

顔を会わせた時に三谷が俺に滅茶怯えていて、流石にちよつと凹んだが。

囲碁が結構強かったな、と思い出して。俺は勧誘目的で囲碁部の話をしたら、三谷が興味を持ったので、そのまま囲碁部に連れてきたのだ。

「筒井先輩、あと一人で今年の大会に出られますよ」

「あ……」

俺の言葉に筒井先輩はすぐに嬉しそうに笑った。



「中学夏期囲碁大会？」

「うん、出るつもり」

「ヒカルが出るの？」

「うん」

囲碁サロンで、アキラと対局と検討が一段落したので、お茶を飲みながら、アキラと世間話をする。

「ヒカルちゃんが出るのか、相手が可哀想になるね」

「いやいや、相手にとっては、良い経験になるんじゃないか？」

近くには常連さんから、そんなことを言われて、確かに俺もとい佐為が打つと実力差があるよなあ。と思う。

でも、一般的な中学生達の碁も見ておいた方が、佐為の今後の為になるのでは？ と思つて佐為と話し合つた。

今の大会に出る中学生はも今は強くなくても、将来のタイトルホルダーになるかもしれない。

だから、今のうちに顔見知りになっておけば、将来のプロになつても打つてるかもし

れない。

アキラや名人みたいに。

「流石に（佐為の）実力差があるから、来年は出ないけど、個人的には数少ない囲碁をしている女子と知り合いになりたいなあ、とね。平安時代は女性も沢山打っていたみたいだし、同性の碁を打つ友達、仲間をさがしたいなあって」

「……確かに女の子で碁を打つ子は少ないね。院生には何人かいるけど」

「長時間の対局があるかね。男女で体力差があるからね。プロを目指すなら、囲碁の勉強だけではなく、体力トレーニングも必要かな」

あかりにも、軽く走り込みさせるか？ プロを目指すとは思わないけど。うーん。

「そーいやあ、ヒカルちゃんはプロにならないんだって？」

「はい、少なくとも高校を卒業するまでは、俺の碁は研究系だし」

「前に言っていた【神の一手】か、ヒカルちゃんの実力を知らなければ鼻で笑うけれど」
「緒方さんよりも強いからなあ」

そう言えば、俺もこのサロンで常連さんに指導碁を打つようになっていた。

「まあ、ヒカルなら優勝間違いないだろうけど、やり過ぎないように」

「分かってるよ、アキラ」

俺は右隣にいる佐為を見た。

「だよな、佐為」

『ええ、もちろん』

佐為なら若い芽を摘むようなことはしないから安心だ。

それにプロにはならないから、中学夏期囲碁大会に参加できる。

今世は学業も頑張ろう。前世は受験とかも惰性で決めたしな。やっぱり良い学校に行ってみたし……。あ、なんなら女子高とか目指そうかな。

だとしたら、今から対策した方が良いか。

「うん、やはり色々、楽しみだ」

まずは、もう一人男子と女子の部員を探さないとな。

大会に向けて

放課後、俺、あかり、筒井先輩、三谷の四人は理科室を借りて、碁の練習をしている。

基本的に、俺もとい佐為が三人へ指導碁を打つ感じた。

三谷は最初は俺が指導碁を打つと言うと「なめんじゃねえ！」と怒っていたが、盤上で完膚なきまでに佐為にやられて、それ以降は大人しくなった。

純粹に俺もとい佐為に畏敬の念を持ったらしい。

話してみると三谷は我流で覚えたらしく、佐為は変な癖を矯正することから始めたらしい。

ただ、三谷の長所を潰さないように気を付けているみたいだ。

観察力とか、勘の良さとか。

筒井先輩は本を読んで、知識はしっかりしている。

ただ、本に依存しているの、本に触れさせず、自分で考え打たせている。

ひたすらな！

あかり基礎を終えたので応用といったところだ。

ただ、あかりは碁を純粋に楽しんでいるので、上手くなっているけど、強くなるには時間が掛かりそうだ。

性格的にも真剣勝負を何度も出来るタイプではない。

「こんちゃー、今日も打とうか」

「おう」

「こんにちは」

理科室に入ると先に来ていた三谷が囲碁盤をだしながら返事をする。

「今日も三面打ち？」

「うーん、今日は一人ずつにしようか？」

「なら、俺と打とうぜ」

「いよいよ」

あかりと三谷と話ながら、俺は三谷と打つ。あかりは俺の隣で見学。

対局は大会を考慮して、自腹切って時計などを購入。

筒井先輩は驚いていたが「金はある！」と、自信満々で言うと、何度も俺にお礼を言っていた。

周りに同じ趣味の仲間、理解者が居ないのは、やはり辛かったらしい。

「あ、ありません」

「ありがとうございます。三谷、ここなんどけど」

こうして、佐為の指導を行いながら、皆の鍛練を行った。

「ごめん、遅れた」

「大丈夫ですよ、筒井先輩」

男女共にあと一人、何処かに居ないかな。

とか思っていたら、同級生の夏目くんとバレー部の金子さんが部活に入ってくれた。

理由は月一度の全校集会だ。

そこで、大会などで優勝した生徒が表彰される。

で、俺は先月行われた五月人形を作っている老舗メーカー主催の大会に参加。

優勝の商品が五月人形と粗品で、商品はちよつと微妙だったが五月人形は物がしつかりしているの、大事にしまっている。

アマチュアの腕に覚えのある大人達が参加している大会で余裕を持って優勝、全校集会で俺が表彰された。

その時に、気をきかせてくれた校長が、「囲碁部は部員を募集していますよ」と言って

くれたのだ。

後に知ったのだが、校長は嗜み（大人の付き合い）で囲碁や将棋が出来るらしい。だから大人に混じってアマチュアの大会、小規模とは言え優勝がどれだけ大変か分かっていたようだ。

こうして、大会へ向けて、正式な部活になり。

皆と部活に精を出すことになった。

★

「じゃあ、今日の練習はこれで終わり。みんなお疲れ様でした」

「……お疲れ様でした」

筒井先輩もとい囲碁部の部長の号令で、俺達は一斉に頭を下げる。

礼に始まり礼に終わる。挨拶大事。

で、皆で途中まで家に帰る途中。

「囲碁って、奥が深いわね」

『そうでしょうとも！』

金子さんの言葉に、佐為がうんうんと頷いている。

佐為、金子さんには聞こえないからね。

「うん、途方もないよ。俺もまだまだだからね」

「ヒカルでも、まだまだって」

「宗教の修行みたいなどころはあるね」

本当に佐為、もとい人類は神の一手に辿り着けるのか。そう思ってしまうよ。

「修行かあ」

「あかり？」

「うーん、もつと強くなれたら、いいなあって」

少し悩んでいるような雰囲気で、そう呟くあかり。

暇さえあれば、あかりは俺と碁を打っている。

かなり上達してはいるが、やはり強いと言うよりは、上手くなった。と言うべきだな。

「大丈夫、これから学んでいけば良いから」

「うん、分かった」

「ああ、そう言えば今の筒井先輩達なら、大会も良い線に行くんじゃないですか？」

俺の言葉に前を歩いてた三人が歩く速度を落として、答える。

「うーん、組み合わせ次第かな。やっぱり、海王は強いからね。ひかるくんのお陰で強く

なったけれど」

「勝つに決まってるだろ」

「進藤のおかげで、囲碁が上手になったし、勝ちたいかな」

三人は気負っていないみたいだな。

精神状態は対局に影響する。

本番も普段通りに打てると良いけど。

★★★

進藤達と別れて囲碁部の男子の三人は苦笑いしながら、こう呟いた。

「ヒカルの圧力を毎日受けながら碁を打ってるだけ。中学生レベルに負けるわけにはいかねえよ」

「三谷は大人と打っていたんだっけ？」

「ああ、下手な大人よりも圧力が凄いわね」

「そうだね、入部初日から大変だったなあ。対局する時に向かい合って、本当に目の前にいるのは、同級生の女の子なのかと疑ったよ」

「ぼくもだよ。年下の女の子に圧倒された。けど、お陰で海王とも普段通りに打てそうだよ」

後に全国的に有名になる葉瀬中、その初陣が迫っていた。